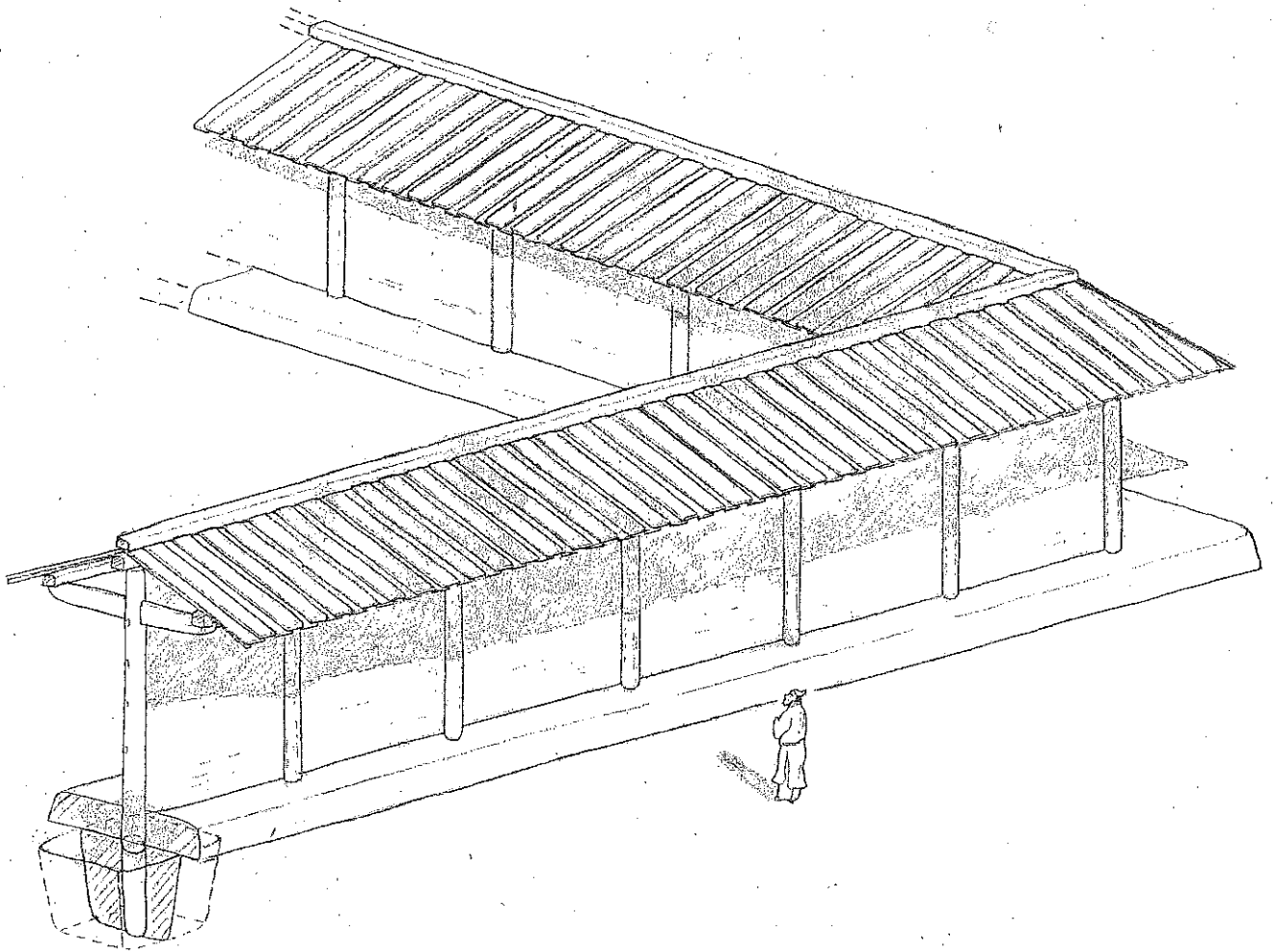


平成 28 年度  
恭仁宮跡発掘調査（第 96 次）  
現地説明会資料



京都府教育委員会  
平成 28 年 12 月 3 日（土）

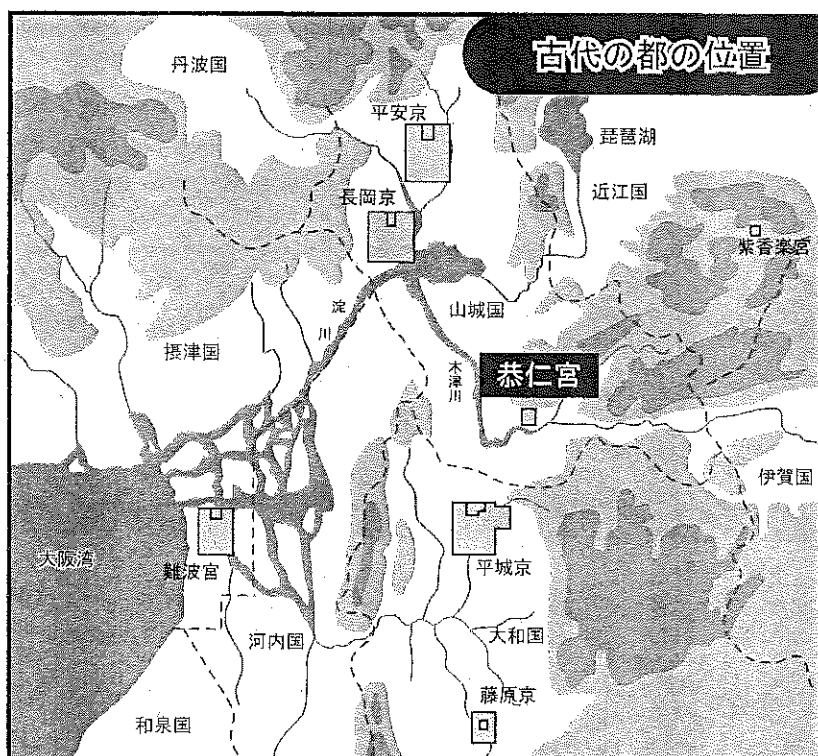
## はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年までその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「くにきょう恭仁京」、その中心となるのが、加茂町みかのほら瓶原の地に造られた「くにきゅう恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏だいり、政治や国家の儀式などがおこなわれた大極殿だいごくでんや朝堂院ちょうどういん、さらには官人達が仕事を行った役所かんが(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、その4年後の天平16(744)年には、都は現在の大阪市の難波宮なにわのみやへと遷され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、その役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。



## これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が毎年実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実体が少しずつ分かってきました（第1図）。

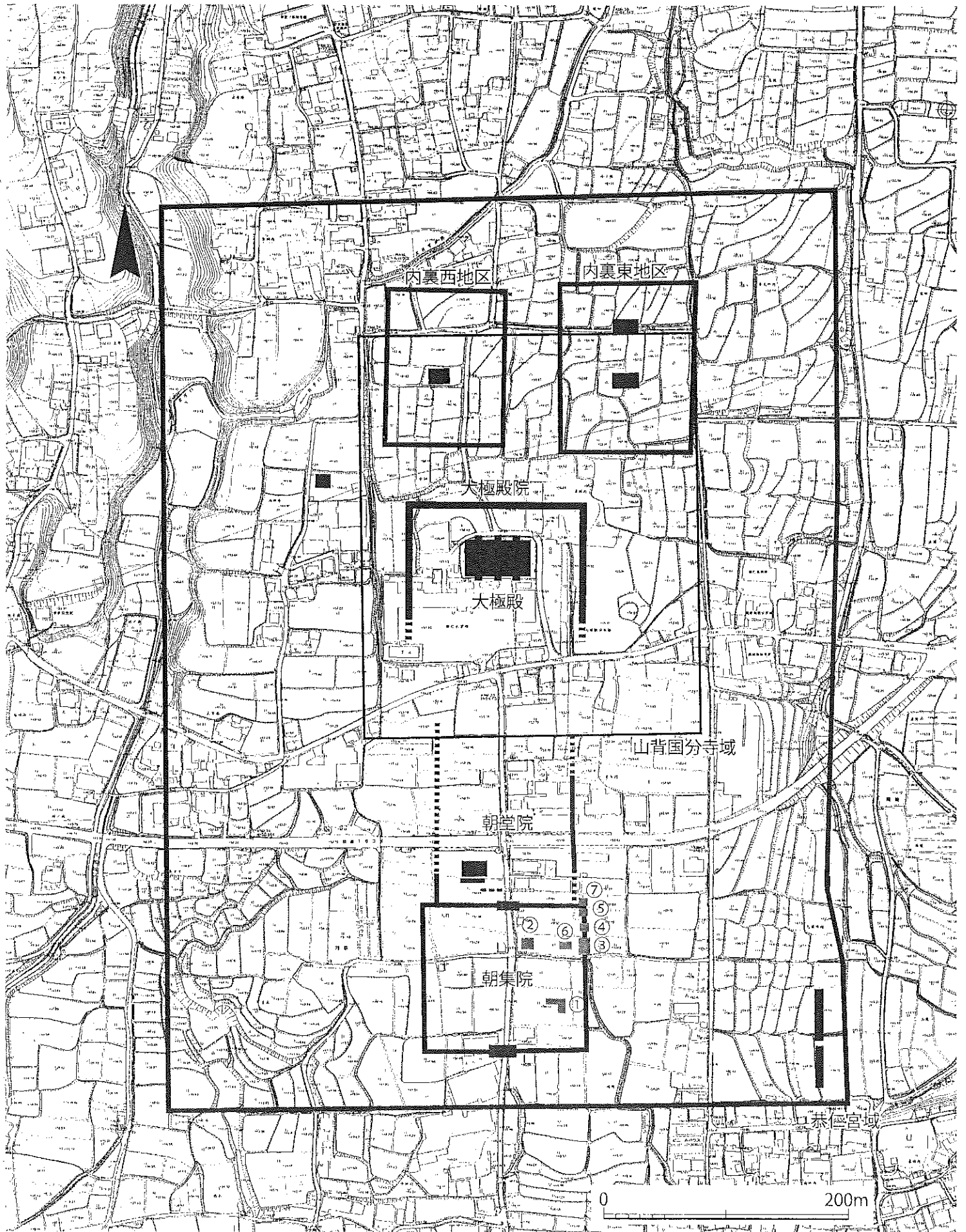
恭仁宮は東西に約560 m、南北に約750 mの大きさを設計され、その周囲は高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1 m以上の大きな土壇の上に造られた東西が45 m、南北が20 mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれていた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によってわかりました。

大極殿を取り囲む大極殿院回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代に関する公の歴史書である『続日本紀』には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊（回廊）」が恭仁宮へ移築されたことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿の北側には、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいますが、このような施設の配置は、恭仁宮以外には見られなかったもので、どちらが天皇の住まわれた内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98 m、南北約128 mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）、残る南側、東側及び西側は、土塀（築地塀）で囲まれており、東西約109 m、南北約139 mの大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることが分かっています。

朝堂院・朝集院では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集院は、東西約134 m、南北約125 mの規模で、南側の朝集院南門が見つっています。朝堂院は、朝集院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。南部では、朝堂院南門、朝堂に相当する建物が1棟、そして元日朝賀に伴う宝幢（幢旗）遺構が見つっています。



第1図 恭仁宮跡全体図および平成28年度調査対象地位置図 (S=1/4,000)

## 平成 28 年度調査でわかったこと

---

### 1. 朝集院の調査（第 2 図・第 3 図）

朝集院は、官人たちが勤務前の早朝に集合し、朝堂院南門が開くまで待機した空間とされています。他の宮跡の多くでは、朝集院の中で左右一对の「朝集堂」と称される建物が見つっていますが、恭仁宮跡では未検出です。今年度は朝集院の範囲及び内部構造を確認するため、7箇所の特レンチを設定して調査を行いました。

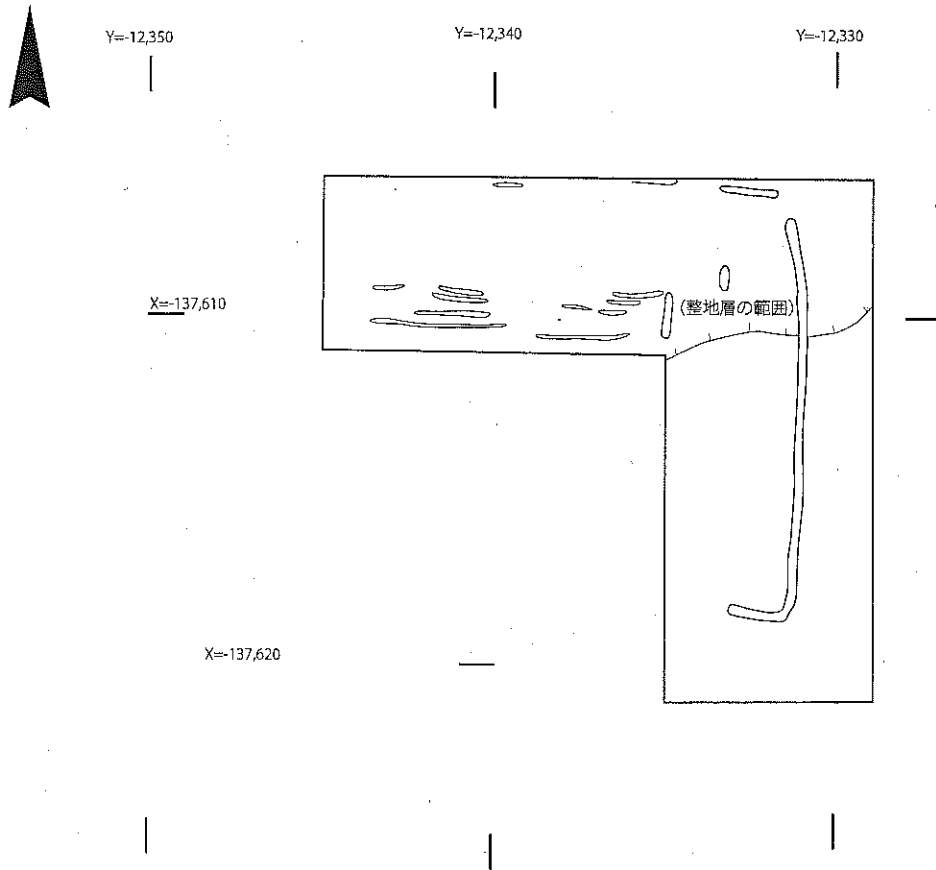
朝集院の南東部に設定した第1特レンチ（第2図上）では、近世の小溝をいくつか検出しました。恭仁宮の遺構は確認されませんでした。特レンチの北部から西部にかけて、恭仁宮造営に伴う整地層を検出しました。土層の観察から、東から西に下る自然地形を埋めて平坦に整地したことが分かりました。

朝集院中央東よりの地点に設定した第2特レンチ（第2図下）では、特レンチ中央部で柱穴を数基検出しました。南北及び東西方向に並ぶことから、掘立柱建物または柵の一部と推測されます。時期は不明ですが、南北の柱穴列（SA201）は主軸方位が恭仁宮と違うので、恭仁宮に伴う遺構ではなさそうです。

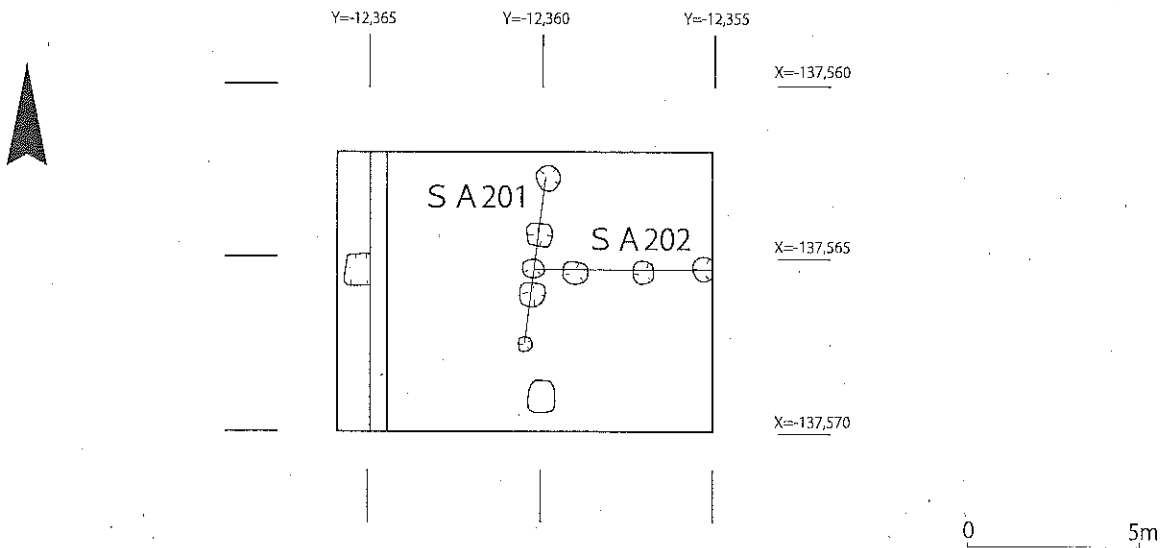
朝集院区画施設の確認のために設定した第3～5・7特レンチ（第3図）では朝集院東辺区画塀と考えられる柱穴列と柱穴列に平行する溝を検出しました。柱穴の大きさは一辺0.8m～1.3m、柱痕跡の直径は0.4～0.5mです。そして、第5特レンチの柱穴SP502の一部を底まで掘ったところ、深さは1.3mでした。ほかの柱穴も同じくらいの深さと考えられます。大きく深い穴を掘って、太い柱を据え付けていたことが分かります。また、周辺から瓦が出土していないので、屋根が板葺きの掘立柱塀であった可能性が高いです。柱の位置を検討すると、ほとんどの柱が3m（10尺）間隔で並んでいますが、第3特レンチのSP303と304は3.3m（11尺）の間隔です。また、ほかの柱は一直線上に並んでいますが、SP303は位置が少し東にずれています。

溝SD01とSD02は柱穴列に平行する溝です。この2条の溝の性格はまだ不明ですが、溝SD01からは「塼」（古代のレンガ）が1点出土しました。また、SD01とSD02の位置は、柱の位置から0.9m（3尺）ずつ等間隔で距離を保っていることから、柱穴列と関連する遺構と考えられます。第7特レンチのSP701から北には柱穴が検出されず、また、両脇のSD01・SD02が東西方向に直角に曲がること分かりました。したがって、SP701が朝集院の北東角

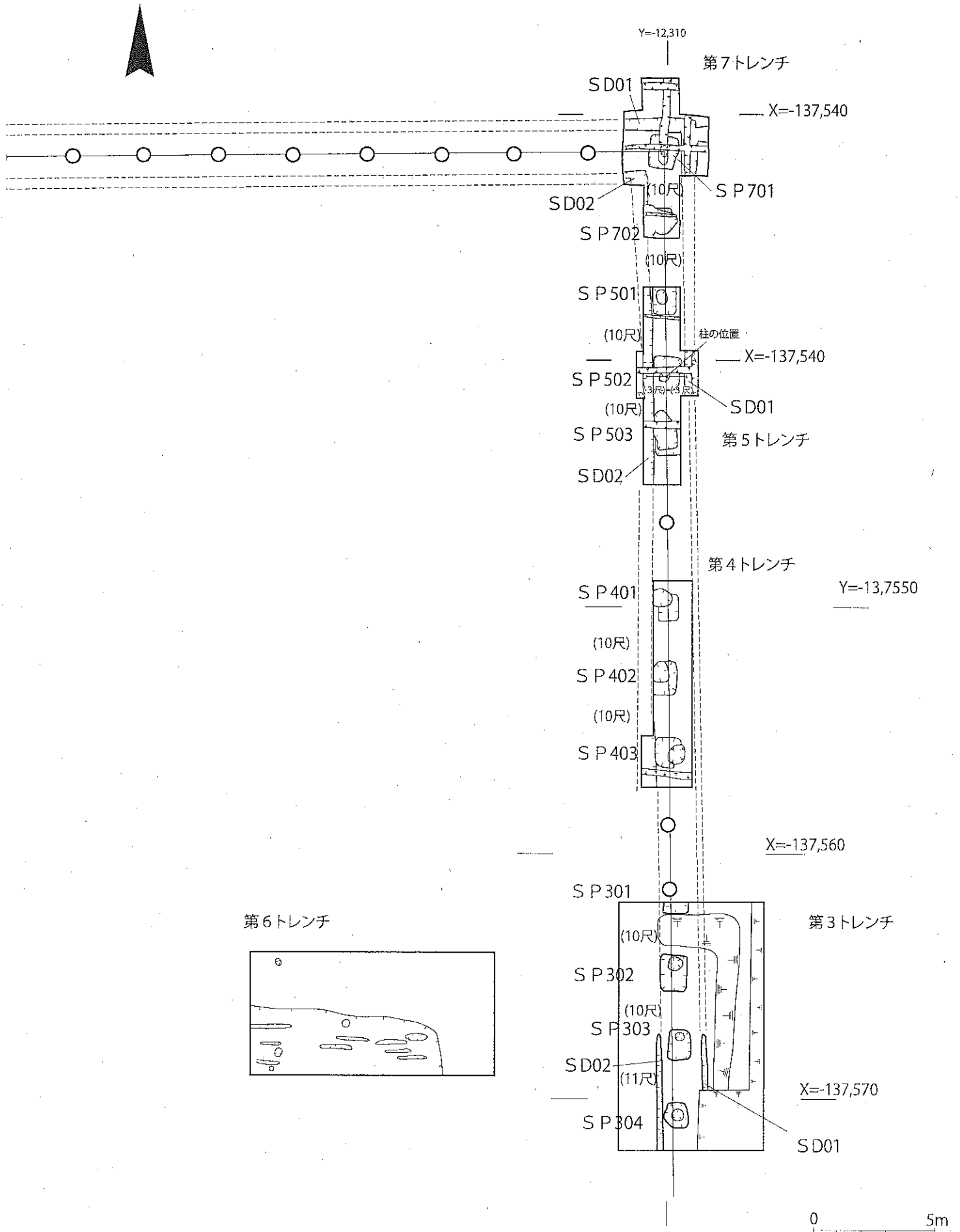
# 第1トレンチ



# 第2トレンチ



第2図 第1・第2トレンチ平面図 (S=1/200)



柱であることが確定しました。過去の調査で南東角、南西角、北西角が既に見つかっているため、今年度の調査で朝集院の四隅の柱位置が確定しました。我が国の宮跡で朝集院の四至が正確に判明したのは、今回が初の事例となります。

朝集院東部に設定した第6トレンチは、「朝集堂」の確認を目的に設定しました。近世の小溝や小土坑をいくつか検出しましたが、恭仁宮に関連する遺構は検出されませんでした。

## 2. 朝集院の掘立柱塀について（第4図）

今年度の調査で朝集院の四至が確定し、四周にめぐらされた掘立柱塀の全体像を解明する手がかりが得られました。

まず、朝集院の四隅の直線距離を正確に計算できるようになりました。そして計算の結果、東辺の長さは124.8 m、南辺は133.7 mであることが分かります。宮の建築の重要な単位である「尺」の長さは、宮によって長さがまちまちですが、仮に恭仁宮朝集院の1尺の長さを0.297 mとすると、東辺の長さは420.2尺、南辺の長さは450.15尺となり、ほぼ切りの良い数字となります。古代の宮や寺院の建築や区画は切りの良い数字で建てられるので、恭仁宮朝集院は1尺 = 0.297 mで設計された可能性が高そうです。

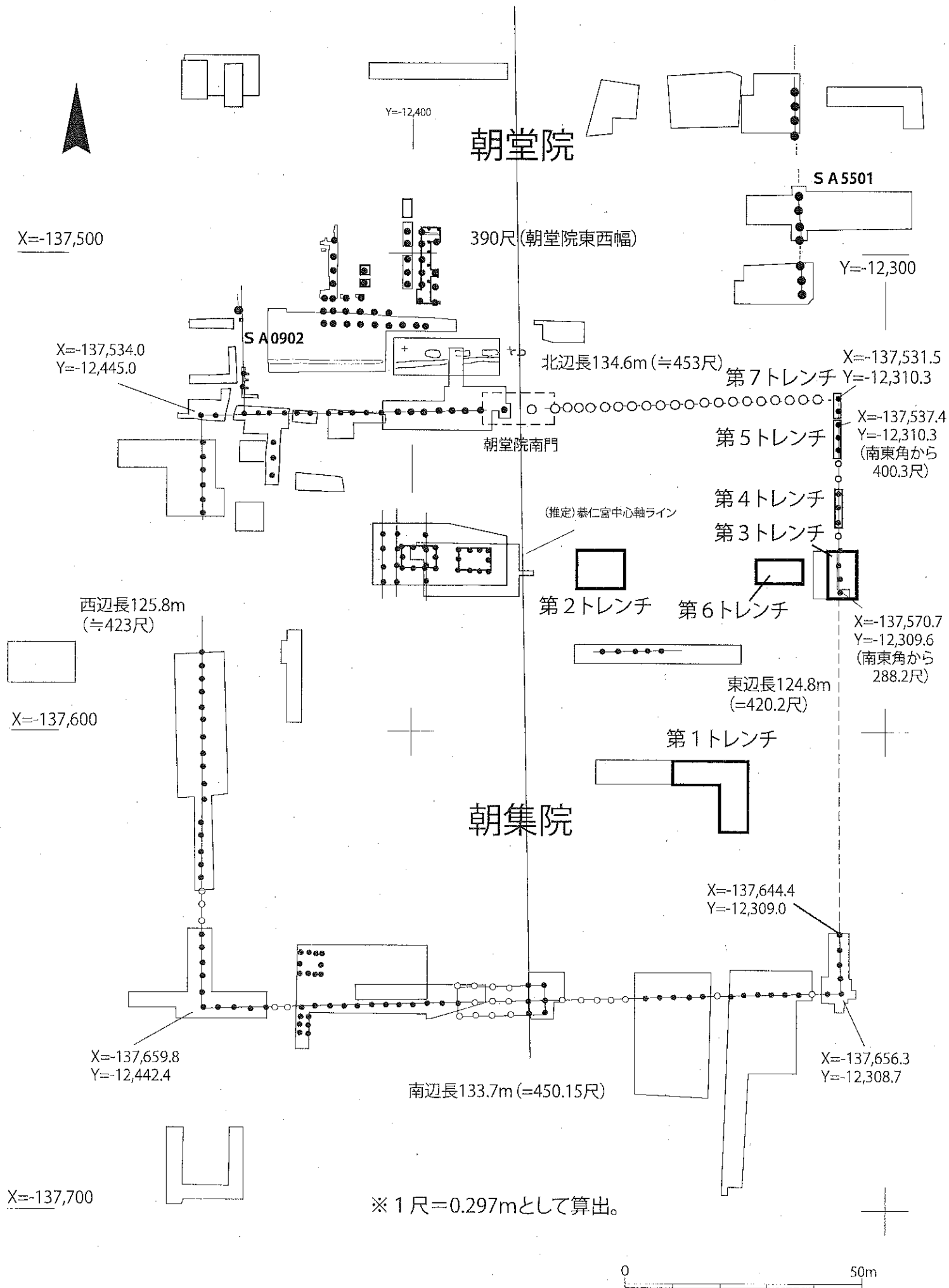
ただし、西辺の長さは125.8 m（約423尺）、北辺は134.6 m（約453尺）であることが分かりました。西辺は東辺より1 m、北辺は南辺より0.9 m長く造られています。なぜ少し長くなっているのかは不明ですが、今後、古代の建築技法を幅広く解明する上で参考となりそうです。

また、朝集院の東辺に注目すると、北東角と南東角の柱の距離は正確な測量で420尺からほとんど誤差がありませんが、中間の柱の距離は統一され規則正しく一直線上に並んでいるわけではなく、第3トレンチSP303のように隣の柱との間隔が広く、直線上に乗らない柱があります。また、平成元年度の第28次調査でも、朝集院南東部で位置のそろわない柱が検出されています。部材の大きさなどに応じて、柱の間隔や位置を調整しているようです。このような工夫があったことも、古代建築を解明する上で重要な成果です。

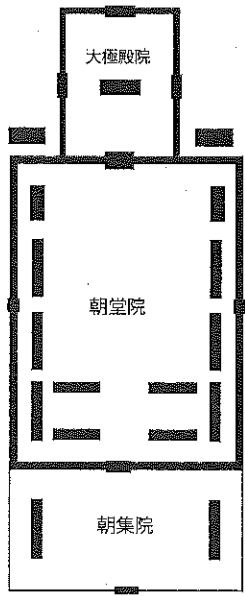
## 3. 他の宮との比較（第5図）

今年度の調査では、朝集院の中で建てられた重要な建物、「朝集堂」を検出することはできませんでした。他の宮跡の朝集院と比較すると、恭仁宮の朝集院だけが南北に長い形態であることが分かります。朝集堂の位置も他の宮跡とは異なる配置だったのかもしれませんが、今後、改めて検討する必要があります。

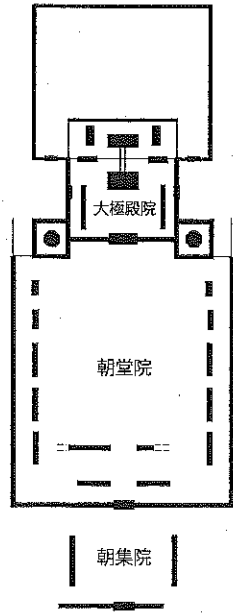




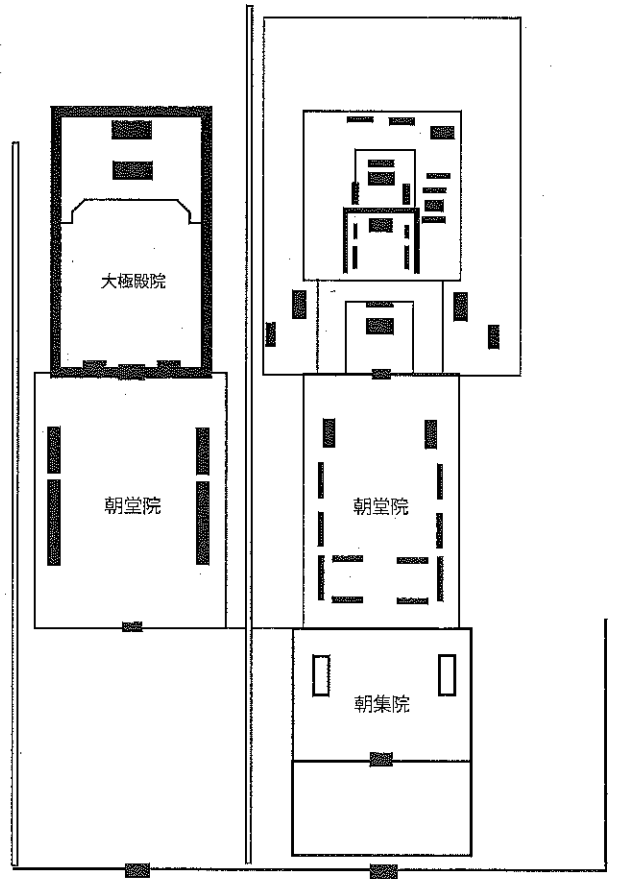
8 第4図 朝集院地区・朝堂院地区南部トレンチ配置図 (S=1/1,000)



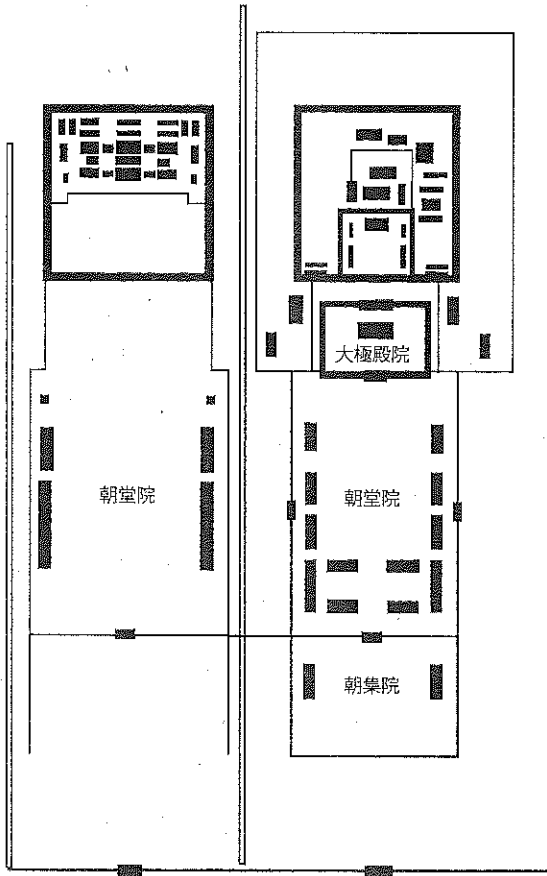
藤原宮



前期難波宮



平城宮 (第一次)



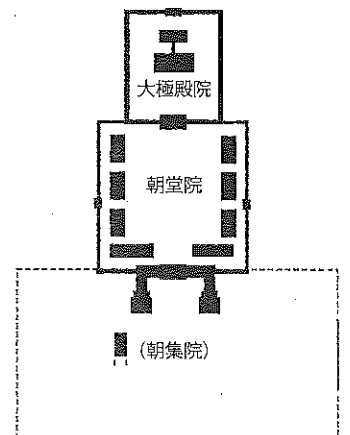
平城宮 (第二次)



恭仁宮



後期難波宮



長岡宮

## まとめ

---

朝集院地区南東部の第1トレンチで恭仁宮の時期と考えられる整地層が検出されたことから、現在の朝集院地区の平坦な地形は、恭仁宮造営に伴って人工的に形成されたことが分かりました。恭仁宮が多大な労力を要して造営されたことを示す成果です。

朝集院地区の東辺北部に設定した第3～5、第7トレンチの調査によって、朝集院地区の北東角を検出しました。恭仁宮の主要区画である朝集院の四至の位置が判明したことから、未解明である恭仁宮の基本設計を検討する上で重要な成果となりました。また、中間の柱間隔や位置が一定でないことが判明したことは、古代の建築技法を復原する上で興味深い成果です。また、恭仁宮朝集院の四至が確定したことは、今後、他の宮跡の内部構造を検討する際に参考となるべき貴重な成果です。

今年度の調査では朝集堂は検出できませんでしたが、朝集堂のありそうな範囲はだいぶ絞られてきました。今後も調査を継続し、恭仁宮の解明を進める予定です。

\*\*\*\*\*

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。

\*\*\*\*\*